

学位論文の内容の要旨

専攻	分子情報制御医学	部門	病態制御医学
学籍番号	15D733	氏名	逢坂理恵
論文題目	Clinical Features of Treated and Untreated Type 1 Idiopathic Macular Telangiectasia Without the Occurrence of Secondary Choroidal Neovascularization Followed for 2 Years in Japanese Patients		

(論文要旨)

【背景と目的】

黄斑部毛細血管拡張症 (idiopathic macula telangiectasia: IMT) は中心窩耳側を中心に網膜毛細血管の拡張・毛細血管瘤を認め、同部位の浮腫あるいは萎縮病変が起こる疾患である。2006年に Yannuzzi らは IMT を type1: 血管瘤型、type2: 血管拡張型、type3: 血管閉塞型の3つの病型に分類した。その中でも type1 IMT は日本で最も多いとされ、主に片眼性に網膜毛細血管瘤が多発する病態である。硬性白斑の集積や浮腫の遷延などにより、視力低下をきたす。治療としては、以前より直接光凝固 (PC) が第一選択として行われてきたが、再発も多く、難治性である場合もある。これまでにトリアムシノロンアセトニドのテノン嚢下注射、デキサメタゾン硝子体投与、抗血管内皮増殖因子硝子体注射などの治療が試みられているが、その効果は不明である。本研究の主な目的は、type 1 IMT に対して、PC、bevacizumab 硝子体内投与 (IVB) を組み合わせた治療を行った症例の2年間の治療経過を検討することである。

【対象と方法】

2007年11月から2012年4月までに香川大学医学部附属病院眼科を受診した治療歴のない type1 IMT で、2年以上経過観察できた49例49眼 (男性29例、女性20例、平均年齢 70.5 ± 11.6 歳) を対象とした。受診時に矯正視力の測定、カラー眼底撮影、光干渉断層検査を施行した。logMAR 視力 0.2 以上、及び黄斑部網膜厚 $350 \mu\text{m}$ 以上の症例を治療適応とした。初回治療として、網膜毛細血管瘤が中心窩から十分に離れていて、PC 可能な症例には PC を行い、それ以外の症例には IVB を行った。初回治療後、嚢胞様黄斑浮腫 (CME) が遷延、再発した症例に対して IVB の追加治療を行った。平均経過観察期間は 29.2 ± 4.5 か月であった。

【結果】

2年間の治療は PC 単独群 9 眼、PC 後 IVB 追加治療群 (IVB 投与回数 1.8 ± 1.7 回) 12 眼、IVB 単独群 (IVB 投与回数 2.1 ± 1.0 回) 10 眼で、無治療群は 18 眼だった。黄斑部網膜厚は初診時 $375.0 \pm 94.5 \mu\text{m}$ から2年後には $315.3 \pm 78.5 \mu\text{m}$ と有意に減少し ($p < 0.001$)、15 眼 (31%) では CME が完全に消失していた (PC 単独群: 初診時 $350.2 \pm 62.6 \mu\text{m}$ 2年後 $296.4 \pm 90.1 \mu\text{m}$ 、PC 後 IVB 追加群: 初診時 $485.6 \pm 97.3 \mu\text{m}$ 2年後 $389.8 \pm 88.3 \mu\text{m}$ 、IVB 単独群: 初診時 $362.8 \pm 49.9 \mu\text{m}$ 2年後 $291.2 \pm 56.9 \mu\text{m}$ 、無治療群: 初診時 $321.1 \pm 60.9 \mu\text{m}$ 2年後 $288.2 \pm 34.7 \mu\text{m}$)。黄斑部網膜

厚は、IVB 単独群 ($p=0.012$)、PC 後 IVB 追加群 ($p=0.020$) で初診時と比較して有意に減少した。初診時 logMAR 視力は 0.20 ± 0.19 で、2 年後 logMAR 視力は 0.13 ± 0.22 と維持されていた (PC 単独群: 初診時 0.23 ± 0.18 2 年後 0.16 ± 0.14 、PC 後 IVB 追加群: 初診時 0.32 ± 0.18 2 年後 0.25 ± 0.23 、IVB 単独群: 初診時 0.20 ± 0.11 2 年後 0.16 ± 0.32 、無治療群: 初診時 0.11 ± 0.16 2 年後 0.03 ± 0.13)。logMAR 視力で 0.3 以上を有意な変化とすると、視力が改善できた症例は 7 眼 (14%)、維持できた症例は 41 眼 (84%) であった。経過観察中に 6 眼で網膜静脈閉塞症を併発していた。

【結論】Type 1 IMT に対して PC や IVB を組み合わせた治療を行うことにより、黄斑浮腫を消退させ、2 年間視力維持を得ることができた。

掲載誌名	RETINA 38 (Suppl1) :S114-S122		
(公表予定) 掲載年月	2018年 1月	出版社(等)名	Wolters Kluwer
Peer Review	有		

(備考) 論文要旨は、日本語で1,500字以内にまとめてください。